NY エッセイ 113

中瀬有紀

失われた芸術

©Pascal Perich

静かなタイムズスクエア

前例に頼ることの出来ない新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）との戦いは、刻々と状況が変化し、臨機応変な対応と決断を強いられています。3月27日に米国で成立した2兆ドル（約220兆円）のSARS-CoV-2に対処する大型経済対策法案により、通常は失業保険の適応外とみなされる自営業者やフリーランスも、同保険の申請が認められるようになりました。アメリカを拠点とする舞台照明のデザイナーはほとんどがフリーランスか個人事業主なので、この新法案は彼らにとって最大の助け舟と言えるでしょう。ニューヨークモーターショーが4月上旬に開催されるはずだった会場のジェイコブ・ジャヴィッツ・コンベンション・センターは仮設病院となり、セントラルパークの芝生には臨時野営病院となるテント状の施設が設営されました。ニューヨークの港ピア90は新作映画のプレミア上映会などに使用されるイベント会場として馴染みがありますが、今は米軍病院船の埠頭として使用されています。誰も予想しなかった、信じられない、まさかの事態の連続です。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大の影響で、500名以上が参加するイベントや集会の禁止が勧告されたのは3月12日、ブロードウェイ全公演の休演が決まったのはその日の夜公演からです。収容人数に関わらず全ての劇場を閉鎖すべしとする行政命令にデブラシオNY市長が署名するとの発表があったのは、そのわずか3日後でした。この文章を私が書いている4月上旬現在、照明デザイナーまたはアソシエイト照明デザイナーとして参加していた7作品が全て中止か無期限の延期となりました。複数の図面の締め切りに追われ、十分な睡眠時間も自炊する時間も全く取れなかったありふれた日常が、今はもう遠い昔のように感じます。ウイルス対策も含め家の中の掃除に精を出したり、慣れないケーキを焼いてみたり、ため込んだ書籍に手を伸ばしたりしていますが、ものすごい勢いで増加するCOVID-19感染者数と関連死亡者数の報道を横目に、なかなか集中できずにいます。中でも患者への人口呼吸器が不足しているという医療従事者の訴えは痛々しく、自宅待機の行政命令に従うことでしか社会の役に立てない自分を情けなく感じます。

COVID-19によって失われた芸術について語られるとき、その経済的損失について焦点が当てられがちですが、同時に私たちが失くしたものは、人が集まること、面と向かって対話することです。メールのやりとりが喧嘩のようになってしまい、どうにもこうにもならない相手と嫌々でも会って話したら、案外スムーズに解決したことがありますが、人と会って向き合うという行動には、お互いの理解を深める魔法のような力があるようです。舞台芸術も私にとってそんな魔法のようなものです。もちろん作品によって魔法の種類は様々ですが、人が一つの場所に集い、他者について学ぶことから己を知り、日々の糧に感謝し、感情に寄り添い、優れた才能と努力を称え、生と死を考える場所が私にとっての劇場です。人生を変えるような観劇経験からは、見ず知らずの他人の人生に触れ、見えない敵を見えるものにし、見えないものを信じる強さを与え、他者との境界線を知ることから寛容な心が得られます。その価値は、お金に換えられるものではないでしょう。

古代ギリシャの劇場に祭壇があったように、演劇が宗教的儀式から派生した神話だとすると、舞台芸術は少なくとも二千年以上にわたり、人類に必要とされてきたと言えます。もし今回のパンデミックが終結した後でもこの仮説が有効なら、たとえ一定期間の休止を経ても舞台芸術はいつか私たちの日常に戻ってくるはずで、そう信じたいです。照明デザインを職業だと言えることは、本当に幸せなことで、社会と自分の心が平穏な証拠なのかもしれません。またいつか劇場で仕事する日が来るまで、なんとか健康を維持し、勉強を怠らず、とにかく生計を維持するのが今の私に課されている課題です。COVID-19に罹患された方々の一日も早い回復を心より願い、制限ある状況下で新型ウイルスと戦っておられる医療従事者にエールを送り、そしてお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げます。